

論文

## 原始仏教の教理項目に現れる kāma と bhava について

安 藤 淑 子

〔抄 録〕

原始仏教における kāma の用法は、韻文経典・散文経典のそれぞれに異なる特徴を見ることができる。そのうちの 하나가、散文経典における定型化された教理項目中の kāma の用法である。本稿では kāma を含む教理項目を分析するとともに、kāma と共起することの多い bhava と kāma の関係性に関する考察を行った。

その結果、「三漏」、「三愛」、「三求」等の教理項目において、kāma と bhava は並行する一対の概念として位置付けられていることが明らかとなった。一方で、「三有」における kāma と bhava は、これらとは全く異なる静的・状況的な特徴を有しており、ここに kāma と bhava に対する明らかな用法上の変化を見ることができる。

**キーワード：**教理項目、kāma、bhava、並行的概念、用法上の変化

### 1. はじめに

本稿の目的は、種々の定型化した教理項目中に組み込まれた kāma の意味、及び思想的な位置付けを考察することである。そのため、はじめに DN, 33 経 (Saṅgīti-sutta) 及び 34 経 (Dasuttara-sutta)<sup>(1)</sup> を用いて、原始仏教における kāma を含んだ教理項目の全体像を概観した。DN, 33, 34 経というのは、原始仏教の定型的な教理項目を経典中から網羅的に蒐集した上で、これらを一法から十法まで増一的に分類して示した特殊な経典であり<sup>(2)</sup>、この二経によって、経典中に現れる教理項目の全容を概ね把握することができる。但し、網羅的な蒐集である故に、個々の教理項目の使用頻度や、成立の新古、或いは思想的な重要性等を判定することはできない。また、両経に用いられる教理項目の総称は、あくまで法数による分類名称であって、すべてがそのまま経典中に用いられているとは限らないのだが、本稿の考察においては便宜的にこれを用いている。

次頁の表には、kāma を含んだ教理項目を示した。表の上二列は kāmā が教理項目の総称として立てられたものであり（「三の欲の再生」、「五欲 (pañca-kāmaguṇā)」）、三列目以降は

kâma が他の教理項目の下位分類中に含まれたものを示した。表から見て取れるように、kâma は主として教理項目の下位分類、すなわち構成要素として用いられることが多く、本稿でもこのような形での kâma の用法に焦点を当てる。その際には、kâma と同じ下位分類中に置かれた概念との関係性についても分析を行った<sup>(3)</sup>。なぜなら、教理項目が定型化されるに当たって行われた「取捨選択」には、構成要素全体が関わっており、これによって背景となった仏教思想を読み解くことができると考えるからである。

特に着目したのは、下位分類中に kâma と共起する bhava の存在である(表中下線部)。bhava は、「三愛」、「三漏」、「三求」、「四暴流」、「四軌」、及び「四軌からの解放」等、多くの教理項目において kâma と共に下位分類を構成している。そこで、本稿では kâma と bhava の両概念がどのような関係性において用いられているのかという点に焦点を置いて考察を行った。

なお、表中の「三有」には kâma-bhava (欲有) があり、表外の「七随眠 (satta-anusaya)」には kâma-rāga (欲貪) と bhava-rāga (有貪) がある。ここに見られる kâma と bhava に関しても、本稿有の考察の範囲内に含めることとする。

DN, 33 経、34 経に現れた kâma を含む教理項目

法数	教理項目	下位分類
3	ti-kāmūpapatti (三の欲の再生)	paccu-paṭṭhita-kāmā (現前の kâma)、nimitta-kāmā (化作された kâma)、para-nimitta-kāmā (他によって化作された kâma)
5	pañca-kāmaguṇā (五欲)	cakkhu-viññeyyā rūpā iṭṭhā kantā manāpā piya-rūpā kāmūpasamhitā rajanīyā, sotaviññeyyā saddā … (同上)、ghāna-viññeyyā gandhā … (同上)、jivhā-viññeyyā rasā … (同上)、kāya-viññeyyā phoṭṭabbā … (同上)
3	ti-akusala-vitakka / -saṅkappa / -saññā / -dhātu (三不善尋 / 思 / 想 / 界)	kāma, vyāpāda, vihirṃsā
	ti-dhātu (三界)	kāma, rūpa, arūpa
	ti-taṭhā (三愛)	kāma, <u>bhava</u> , vibhava kāma, rūpa, arūpa
	ti-āsava (三漏)	kāma, <u>bhava</u> , avijjā
	ti-bhava (三有)	kāma, rūpa, arūpa
	ti-esanā (三求)	kāma, <u>bhava</u> , brahmacari
4	catu-ogha (四暴流)	kāma, <u>bhava</u> , diṭṭhi, avijjā
	catu-yoga (四軌)	kāma, <u>bhava</u> , diṭṭhi, avijjā
	catu-visaṃyoga (四軌からの解放)	kāma, <u>bhava</u> , diṭṭhi, avijjā
	catu-upādāna (四取)	kāma, diṭṭhi, silabbata, attavāda

## 2. 教理項目中に現れる kâma と bhava

本節では、kâma と bhava が共起する教理項目を、(1)「三漏」・「四暴流」・「四軌」、(2)「三愛」、(3)「三求」の三つのグループに分けて論考する。

## 2.1. 「三漏」、「四暴流」、「四軌」における kāma と bhava

「三漏」、「四暴流」、「四軌」における漏 (āsava)、暴流 (ogha)、軌 (yoga) はいずれも煩惱を表す語である。散文經典中では「三漏」の使用が最多であるため、本節においても「三漏」を中心に考察を行う。

「三漏」における「漏 (Sk. āsrava, ā-√ sru)」<sup>(4)</sup> という語は、古層經典である Sn にも既に14か所に現れ、「有漏 (bhavāsava)」という形での使用も見ることができる(「有漏も粗暴な言葉も滅び、没して存在しない。(Bhavāsavā yassa vacī kharā ca / vidhūpitā atthagatā na santi, (Sn, 472))」)。このように「漏」は出自の古い用語であり、散文經典においては主に「三漏」、或いは「漏尽」という形で言及される。

このうち「三漏」は、kāma と bhava が共に現れる教理項目の中でも最も使用頻度が高い。特に「三漏」は MN、DN に多数出現するのであるが<sup>(5)</sup>、その際には多く「漏尽智 (āsavaṃ khayañāyā)」に関する教説の中で言及される<sup>(6)</sup>。

So evaṃ samāhite cite parisuddhe pariyodāte anaṅgaṇe vigatūpakkilesa mudubhūte kammaniye t̥hite ānejjappatte āsavānaṃ khayañāyā cittaṃ abhininnāmesim̐. So : idaṃ dukkhaṇ - ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ dukkhasamudayo ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ dukkhanirodho ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ dukkhanirodhagāminīpaṭipadā ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐ ; ime āsavā ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ āsavaṃsamudayo ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ āsavanirodho ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐, ayaṃ āsavanirodhagāminī paṭipadā ti yathābhūtaṃ abbhaññāsim̐. Tassa me evaṃ jānato evaṃ passato kāmāsavā pi cittaṃ vimuccittha, bhavāsava pi cittaṃ vimuccittha, avijjāsavā pi cittaṃ vimuccittha, vimuttasmiṃ vimuttam - iti nāpaṃ ahoṣi ; khīṇā jātī, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇīyaṃ nāparaṃ itthattāyati abbhaññāsim̐. (MN, 4)<sup>(7)</sup>

実にこのように心が安定し、清浄となり、浄化され、穢れなく、随煩惱 (upakkilesa) が消失し、柔軟になり、行動が定まり、不動のものになると、「漏」を滅する智に心を向けた。彼は、「苦はこれである」と如実に覚った。「苦の生起はこれである」と如実に覚った。「苦の滅尽はこれである」と如実に覚った。「苦の滅尽に至る実践 (行道) はこれである」と如実に覚った。「漏はこれらである」と如実に覚った。「漏の生起はこれである」と如実に覚った。「漏の滅尽はこれである」と如実に覚った。「漏の滅尽に至る実践 (行道) はこれである」と如実に覚った。このように知り、このように見る私に欲漏より心は解脱し、有漏より心は解脱し、無明漏より心は解脱した。解脱した解脱者にはこの智慧が生じた。「命は尽きた。梵行は完成した。なすべきことはなされた。もはやこの状態 (輪廻) には至らない」と覚ったのである。

「三漏」の下位分類は〈kāma、bhava、avijjā〉の三項である。一方で、「軛」、「暴流」に関しては〈kāma、bhava、diṭṭhi、avijjā〉の四項が立てられるのであるが、実際には「漏」もまた diṭṭhi を加えて「四漏」とされる場合がある。

たとえば、次に示す Dhammasaṅgaṇi (『法集論』)<sup>(8)</sup> には「四漏」に関する解説が見られるが、ここでの解説はそのまま「四軛」、「四暴流」における〈kāma、bhava、diṭṭhi、avijjā〉に当てはまると見てよいだろう。はじめに「欲漏」、「有漏」に関しては次のように述べられている。

Tatta katamo kāmāsavo? / Yo kāmesu kāmaccchanda kāmarāgo kāmanandī kāmataṇhā kāmasineho kāmapiṇṇāso kāmapiṇṇāso kāmapiṇṇāso kāmamucchā kāmajjhosaṇaṃ - ayaṃ vuccati kāmāsavao.

Tatta Katamo bhavāsavo? / Yo bhavaccchanda vhabarāgo bhavanandī - bhavataṇhā bhavasineho bhavapiṇṇāso bhavamucchā bhavajjhosaṇaṃ ayaṃ vuccati bhavāsavo.

(Dhammasaṅgaṇi, 1097-1098)<sup>(9)</sup>

「欲漏」とは何か。kāma における kāmā への欲求、kāma への貪り、kāma における喜び、kāma への渴愛、kāma への愛執、kāma への渴望、kāma による苦悩、kāma における昏迷、kāma への執着、これが「欲漏」と言われる。

「有漏」とは何か。bhava への欲求、bhava への貪り、bhava における喜び、bhava への渴愛、bhava への愛執、bhava による苦悩、bhava における昏迷、bhava への執着、これが「有漏」と言われる。

このように、「欲漏」における kāmā とは、煩悩を発生させる人の様々な心の働きの「対象」とであるとされている<sup>(10)</sup>。同様のことが、次の「有漏」に関しても記述されている。したがって、少なくとも Dhammasaṅgaṇi において、kāma と bhava は極めて類似した概念であると言えることができるだろう。

これに対して、「見漏」と「無明漏」に関しては次のような解説が行われている。

Tatta katamo diṭṭhāsavo? / Sassato loko ti vā asassato loko ti vā antavā loko ti vā anatavā loko ti vā, taṃ jīvan taṃ sarīran ti vā aññaṃ jīvaṃ aññaṃ sarīran ti vā hoti tathāgato paraṃ maraṇā ti vā, na hoti tathāgato paraṃ maraṇā ti vā, hoti ca na ca hoti tathāgato paraṃ maraṇā ti vā, neva hoti na na hoti tathāgato paraṃ maraṇā ti vā, yā evarūpā diṭṭhi diṭṭhigataṃ diṭṭhigahaṇaṃ diṭṭhikantāro diṭṭhivisūkāyikaṃ diṭṭhivipphanditaṃ diṭṭhisaññojanaṃ gāho abhiniveso parāmāso kummaggo micchāttaṃ titthāyatanāṃ vipariyesaggāho - ayaṃ vuccati diṭṭhāsavo - sabbāpi micchādiṭṭhi diṭṭhāsavo.

Tattha Katamo avijjāsavo? / Dukkhe aññāṇaṃ dukkhasamudaye aññāṇaṃ dukkhanir-  
odhagāminiyā paṭipadāya aññāṇaṃ - pubbante aññāṇaṃ aparante aññāṇaṃ  
pubbantāparante aññāṇaṃ - idapaccayatā paṭiccasamuppannesu dhammesu aññāṇaṃ yaṃ  
evarūpaṃ aññāṇaṃ adassanaṃ anabhisamayo ananubodho asambodho appaṭivedho  
asaṅgāhanā apariyogāhanā asamapekkhanā apaccavekkhanā apaccakkhakammaṃ  
dummejjhaṃ balyaṃ asampajaññaṃ moho pamoho sammoho avijjā avijjogho avijjāyogo  
avijjānusaya avijjāpariyuṭṭhānaṃ avijjālangī moho akusalamūlaṃ - ayaṃ vuccati avijjāsavo  
- Ime dhammā āsavā. (Dhammasaṅgaṇi, 1099-1100)<sup>(11)</sup>

「見漏」とは何か。世界は常住であるか無常であるか、世間は有辺であるか無辺であるか、  
霊魂とは身体であるか、或いは霊魂と身体は別のものであるか、如来は死後も存在するの  
か、或いは存在しないのか、或いは存在するのではなく存在しないのでもないのか、この  
ような見解、悪見、辺執見、見解の荒野、見解の争い、見解の争論、見解の縛り、固執、  
執着、取著、邪道、邪、外道、顛倒した見解、これらを「見漏」とであると言われる。一切  
の邪見も「見漏」である。

「無明漏」とは何か。「苦」に関する無知、「苦の生起」に関する無知、「苦の滅に至る道」  
に関する無知<sup>(12)</sup>、過去に関する無知、未来に関する無知、過去から未来に関する無知、  
縁性、縁起の法に関する無知、このような無知、無見、無現観、無覚、無正覚、無理解、  
無自制、無深解、無静観、無観察、無眼前業、愚鈍、魯鈍、非正知、痴愚、蒙昧、迷妄、  
無明、無明人、無明軛、無明の随眠、無明の纏、無明柵<sup>(13)</sup>、痴愚、不善の根、これが  
「無明漏」と言われる。これらが、漏の法である。

こうして見ると、「見漏」、「無明漏」の解説内容は、先の「欲漏」、「有漏」とは大きく異  
なっている。「欲漏」、「有漏」、「見漏」、「無明漏」の中では、「欲漏」、「有漏」の解説がほぼ一  
対を成しているものであり、この点から見て、kāma と bhava は「四漏」においてある種の並行  
的な関係にあったと考えてよいだろう。

無論、上記は論書の記述であり經典の時代よりも概念整理がさらに進んだ後のものであると  
見るべきだが<sup>(14)</sup>、kāma と bhava が教理項目の下位分類中に組み込まれた時点において、既  
に両概念の選択にある種の共通性が認識されていたと見ることは可能だろう。

## 2.2. 「三愛」

taṇhā (=tasiṇā, Sk. tṛṣṇā) は「心の働き」を表す語であり、肉体的・精神的な渴きを意味  
している。「三愛」の下位分類には〈kāma、bhava、vibhava〉が含まれており、各々が taṇhā  
という「心の働き」の向けられる「対象」を意味している。

一方で、kāma-taṇhā は、しばしば「三愛」とは異なる教説中に見出すことができる。たと

えば MN において「三愛」の一部として kāma-taṇhā が言及されるのは 3 か所であるが、下記の用例のような kāma-taṇhā は全体の 13 か所に見ることができる。

So aparena samayena kāmānaṃ yeva samudayaṃ ca atthagamaṃ ca assādaṃ ca ādīnavaṃ ca nissaraṇaṃ ca yathābhūtaṃ veditvā kāmataṇhaṃ pahāya kāmāpariḷāhaṃ paṭivinodetvā vīgatapipāso ajjhattaṃ vūpasantacitto viharāmi. (MN, 75) <sup>(15)</sup>

その私は、後に kāma の生起と滅尽と楽味と危難と出離とを如実に見て、kāma に対する渴愛を捨て、kāma に対する熱悩を除き、内に渴きを離れた寂靜の心をそなえて住した。

So aññe satte passāmi kāmesu avītarāga kāmataṇhāhi khajjamāne kāmāpariḷāhena pariḍayhamāne kāme paṭisevante ; (MN, 75) <sup>(16)</sup>

その私は、他の衆生が kāma に対する貪りを離れず、kāma に対する渴愛によって食い尽くされつつあり、kāma に対する熱悩によって焼かれ、kāma に従っているのを見た。

第二章でも論じたように、「kāma に対する〈心の働き〉」という表現形式は古くから存在し、kāma-taṇhā もまたこの形式の一つである <sup>(17)</sup>。したがって、taṇhā は kāmā に対する種々の心の働きの一つに過ぎず、両者の間に緊密な関係性は存しない。

これとは対照的に、taṇhā と bhava の間には初期の韻文經典より既に特別な関係性があったようである。たとえば Sn には、下記に示す用例のように「bhavābhava <sup>(18)</sup>に対する taṇhā」という表現形式が頻繁に現れる <sup>(19)</sup>。

Yesan tu taṇhā n' atthi kuhiñci loke / bhavābhavāya idha vā huraṃ vā, / kālena tesu havyaṃ pavecce, / yo brahmaṇo puññapekho yajetha. (Sn, 496)

しかし、どのような世間においても、この世でもあの世でも、種々の生存に対する渴愛がない人、彼に適時に供物をささげるがよい。バラモンが福を求めて供儀を行うのならば。(Sn, 746)

Passāmi loke pariphandamānaṃ / paṇaṃ imaṃ taṇhāgataṃ bhavesu / hinā narā maccumukhe lapanti / avītataṇhā bhavābhavesu. (Sn, 776)

私は世間において人々が諸々の生存に対する渴愛にとらわれて震えているのを見る。劣った人々は種々の生存に対する渴愛を離れることなく死に直面して泣きわめく。

Tapūpanissāya jigucchitaṃ vā / atha vā pi diṭṭhaṃ va suttaṃ mutaṃ vā / uddhamsarā suddhim anutthunṭi / avītataṇhāse bhavābhavesu. (Sn, 901)

種々の生存に対する渴愛を離れることなく、厭わしい苦行によって、或いはまた見たこと、聞いたこと、考えたことによって声高に清浄を唱えている。

vidvā ca so vedagu nara idha, / bhavābhava saṅgaṃ imaṃ visajja / so vītataṇho anigho

nirāso, / atāri so jātijaran ti brūmi” ti (Sn, 1060)

またこの人は知者、ヴェーダに精通した人であり、種々の生存に対するこの執着を捨て、渴愛を離れ、苦しみなく、求めることなく、彼は生と老いを超えたと私は告げる。」

“Yaṃ kiñci sampajānāsi / Dhotakā ti Bhagavā / uddham adho tiriyaṃ cāpi majjhe, / etaṃ veditvā ‘saṅgo’ ti loke / bhavābhavaya mā kāsi taṇhan “ ti (Sn, 1068)

「ドータカよ、あなたが上、下、横、また中においてよく知るものは何であれ、それは世間における“執着”であると知って、種々の生存に対する渴愛を抱いてはならない。」と世尊は言った。

上記のような用例は、散文經典にも見ることができる。

…yathā ca pana kāmehi viṣaṃyuttaṃ viharantaṃ taṃ brāhmaṇaṃ akathaṃkathitaṃ chinnakukkuccaṃ bhavābhavave vītataṇhaṃ saññā nānuseti, evaṃvādi kho ahaṃ āvuso evamakkhāyī ti. (MN, 18) <sup>(20)</sup>

…そしてまた kāma を離れ、疑いなく、後悔を断ち、種々の生存に対する渴愛を離れて住するこのバラモンに諸々の想の潜在することがないように、友よ、そのように私は説く者であり、語る者である、と。

Tayidaṃ bhikkhave ariyaṃ sīlaṃ anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, ariyo samādhi anubuddho paṭividdho, ariyā paññā anubuddhā paṭividdhā, ariyā vimutti anubuddhā paṭividdhā, ucchinnā bhavataṇhā khīṇā bhavanetti, n’ atthi dāni punabbhavo ti. (AN, 4. 1. 1) <sup>(21)</sup>

比丘達よ、そのようなこの聖なる戒は覺られ、洞察された。聖なる禪定は覺られ、洞察された。聖なる智慧は覺られ、洞察された。聖なる解脱は覺られ、洞察された。生存に対する渴愛を断ち、生存に導くものは滅んだ。ゆえにもはや再生はない。

また、散文經典中の「四聖諦」の教説において「三愛」ではなく bhava-taṇhā (有愛) のみが示される用例がある。

Tayidaṃ bhikkhave dukkhaṃ ariya-saccaṇaṃ anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, dukkha-samudayaṃ ariya-saccaṇaṃ anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, dukkha-nirodhaṃ ariya-saccaṇaṃ anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, dukkha-nirodha-gāmini paṭipadā ariya-saccaṇaṃ anubuddhaṃ paṭividdhaṃ, ucchinnā bhava-taṇhā, khīṇā bhava-netti, n’atthi dāni punabbhavo’ iti. (DN, 16) <sup>(22)</sup>

比丘達よ、あなた方にこの「苦」という聖なる真理は覺られ、理解された。「苦の生起」という聖なる真理は覺られ、理解された。「苦の滅尽」という聖なる真理は覺られ、理解



原始仏教の教理項目に現れる kāma と bhava について（安藤淑子）

された。「苦の滅尽に至る実践」という聖なる真理は覺られ、理解された。生存に対する渴愛は断たれた。生存に導くものは滅せられた。もはや再生はない。

さらに、下記の AN の教説では、解脱に至るために捨て去るべきものとして avijjā と共に bhava-taṇhā が挙げられている。

Katame ca bhikkhave dhammā abhiññā pahātabbā?

Avijjā ca bhava taṇhā ca — ime vuccanti bhikkhave dhammā abhiññā pahātabbā. (AN, 4. 26. 251) <sup>(23)</sup>

また比丘達よ、法を体得して捨て去るべきものとは何であるか。

無知と生存に対する渴愛である。比丘達よ、これらが法を体得して捨てざるべきことと言われる。

このように、taṇhā はしばしば bhava（広く輪廻を含む生存）に対する taṇhā として説かれてきたのであるが、一方で、散文經典においては先述したように教理項目として「三愛」が用いられるようになる<sup>(24)</sup>。このような韻文經典における taṇhā と、散文經典における taṇhā の用法上の相違は、次の Itivuttaka（『如是語經』、以下、It）の用例にも反映されている。下記の引用の散文部分には「三愛（kāma-taṇhā、bhava-taṇhā、vibhava-taṇhā）」が、韻文部分には「bhavābhava に対する taṇhā」が言及されている。

Tisso imā bhikkhave taṇhā. Katamā tisso. Kāmatāṇhā bhavataṇhā vibhavataṇhā, imā kho bhikkhave tisso taṇhā ti. Etam-atthaṃ bhagavā avoca, tatthetaṃ iti vuccati :

Taṇhāyogena saṃyuttā / rattacittā bhavābhava / te yogayuttā mārassa /  
ayogakhemino janā / sattā gacchanti saṃsāraṃ / jātimaraṇagāmino // Ye ca  
taṇhaṃ pahantvāna / vītataṇhā bhavābhava / te ca pāra ṃgatā loke / ye pattā  
āsavakkhayan-ti //

Ayam-pi attho vutto bhagavatā iti me sutan-ti. (It, 58) <sup>(25)</sup>

比丘達よ、「三愛」の三とは何か。比丘達よ、kāma に対する渴愛、bhava に対する渴愛、bhava を離れることにたいする渴愛、これらが三である、と世尊はこのことを説いた。そのときこれについて次のように言われた。

渴愛の軛に相応し、種々の生存に心が染まり、人々は魔の軛に縛られて安穩となることがない。生死を辿る衆生は輪廻に赴く。渴愛を断じ、種々の生存に対する渴愛を離れたものは、煩惱を滅尽したものとして世間において彼岸に赴く。

これが、世尊の説かれた道理であると私は聞いた。



こうして見ると、韻文經典の頃からの bhava と taṇhā の強い結びつきに、散文經典の時代になって新たに kāma が加わり、これを持って「三愛」が形成されたと考えることも可能だろう<sup>(26)</sup>。

それでは、kāma が付加された理由は何だったのだろうか。これに関しては、先述した「三漏」に見られる kāma と bhava の関係性が、ある種の枠組みとして働いたと考えることができるだろう。実際に、「kāma に対する taṇhā」と「bhava に対する taṇhā」の双方を、先の Dhammasaṅgaṇi における「欲漏」と「有漏」の解説中に見ることができる。

さらには、kāma と bhava に対する様々な心の働きのなかから特に taṇhā が取り出され、これを軸に「三愛」という纏まりが形成された背景として、原始仏敎における taṇhā が、次第に重要な意味を担う用語となっていくことを挙げることができるだろう<sup>(27)</sup>。

なお、「三愛」における bhava は、実際には bhava / vibhava の二類に分けられるのであるが、これに関しては既に最古層經典である Av に次のような偈を見ることができる。

Yassa nissayatā n' atthi, ñatvā dhammaṃ anissito / bhavāya vibhavāya vā taṇhā yassa na vijjati, (Sn, 856)

依拠することのない人は真理を知ってもそれに依存せず、生存に対する渴愛も、生存を離れることに対する渴愛も存在しない。

Niddesa によれば、上記の bhavāya vibhavāya とは「有見 (bhavadiṭṭhi) / 無有見 (vibhavadīṭṭhi)」、もしくは「常見 (sassatadiṭṭhi) / 断見 (ucchedadiṭṭhi)」を意味しているという<sup>(28)</sup>。周知のように、原始仏敎が興起した時代には、輪廻を巡って諸学派の様々な見解が唱えられていたのであるが<sup>(29)</sup>、原始仏敎は一貫してこのような見解に拘泥することには否定的な態度を示していた<sup>(30)</sup>。

したがって、「三愛」における bhava-taṇhā、vibhava-taṇhā もまた bhava に対する「見解 (diṭṭhi)」を意味しているのであるが、一見すると「三漏」に現れる bhava とは意味合いを異にしているようにも思われるだろう。しかしながら、生存 (bhava) への見解に拘る心理の根底には、自己自身の存在への強い執着があることもまた事実である。たとえば次の It の用例には、「常見・断見」に一喜一憂する人々のあり様が描かれている。

Dvihi bhikkhave deṭṭhi-gatehi pariyutṭhitā devamanussā liyanti eke atidhāvanti eke cakkhumanto ca passanti. Kathaṅca bhikkhave oliyanti eke? Bhavārāmā bhikkhave devamanussā bhavaratā bhavasammuditā, tesaṃ bhavanirodhāya dhamme desiyamāne cittaṃ na pakkhandati na paṣidati na santiṭṭhati nādhimuccati, evaṃ kho bhikkhave oliyanti eke. Kathaṅca bhikkhave atidhāvanti eke? Bhaveneva kho paneke aṭṭiyamānā harāyamānā

vibhavaṃ abhinandanti. Yato kira bho ayaṃ attho kāyassa bhedaṃ paramu-maraṇā ucchijjati vinassati na hoti param-maraṇā, etaṃ santaṃ etaṃ paṇītaṃ etaṃ yathāvaṇ-ti, (It, 49) <sup>(31)</sup>

比丘達よ、二見によって捕らわれている神々及び人々のある者は執着し、ある者は超越する。また、眼ある者は見る。

それでは、何に執着するのか。比丘達よ、生存を喜び、生存を楽しみ、生存を喜悅する神々及び人々は、生存を出離する教えが説かれつつあるとき、心躍らず、喜ばず、動揺し、信じることができない。比丘達よ、ある者はかくの如くである。それでは、何に超越するのか。実にある者は生存に悩み、愧じ、生存を離れることに歓喜する。なぜなら友よ、意味するところは、体が破壊された死後、切断され消失し、その後の死は存在しない、これが平安であり、すばらしいことであり、真実であるという話である。

このように「見解 (diṭṭhi)」には理知的な側面がある一方で、「常見・断見」のような生存に関わるものには、根底に生命への本能的な渴望が潜在していると理解すべきだろう <sup>(32)</sup>。

### 2.3. 「三求」

esanā (< esati, Sk. eṣaṇā) とは「追究、探求」等を意味する語であり、「三求」には <kāma、bhava、brahmacari> の三項が含まれる <sup>(33)</sup>。

MN には「三求」に関する教説は見られず、DN では 33 経の教理集成に「三求」が示されるのみである。一方で「三求」がしばしば現れる SN、AN においても、その内実に関する具体的な言及は見られない。ただ AN の以下のような用例から、kāma、bhava、brahmacari の三つの概念の相違点を見て取ることができるだろう。

kathaṃ ca bhikkhave bhikkhu samavayasatthesano hoti? / idha bhikkhave bhikkhuno kāmesanā pahinā hoti, bhavesanā pahinā hoti, brahmacariyesanā paṭippassaddhā. Evaṃ kho bhikkhave bhikkhu samavayasatthesano hoti. (AN, 4. 38) <sup>(34)</sup>

比丘達よ、比丘が追究を完全に捨て去るとはどのようなことか。比丘達よ、ここに比丘は kāma への追究を捨断し、bhava への追究を捨断し、清浄行への追究を止息する。このような比丘が、欲求を完全に捨て去った者である。

上記のように、kāma と bhava への追究に関しては捨断 (pahina) が説かれる一方で、brahmacari への追究に関しては止息 (paṭippassambhati) が説かれている。原始仏教は、あらゆる拘りからの脱却を理想としたのであり、清浄行の追究もまたその例外ではなかった。

このように brahmacari の位置付けは、明らかに kāma 及び bhava とは異なっており、「三

求」における kāma と bhava もまた一对のものと見なすことができるだろう。

### 3. kāma と bhava の序列化

以上見てきたように、kāma と bhava は並行的な概念として共起したと考えられるのであるが、一方で修道論が体系化するとともに、kāma と bhava の間にはある種の序列が現れるようになる。これに関する記述は、次の Puggala-paññatti (『人施設論』) に見ることができる。

Katamo ca puggalo kāmesu ca bhavesu ca avītarāgo ? / Sotāpannasakadāgāmino, ime vuccati puggalā kāmesu ca bhavesu ca avītarāgā. / Katamo ca puggalo kāmesu vītarāgo bhavesu avītarāgo ? / Anāgāmī, ayaṃ vuccati puggalo kāmesu vītarāgo bhavesu avītarāgo. Katamo ca puggalo kāmesu ca bhavesu ca vītarāgo ? / Arahā, ayaṃ vuccati Katamo ca puggalo kāmesu ca bhavesu ca vītarāgo. (Puggalapaññatti, 3.8)<sup>(35)</sup>

kāma と bhava において離貪していない人とは、どのようなものであるか。

預流と一来がこれ、すなわち kāma と bhava において離貪していない人と言われる。

kāma において離貪し、bhava において離貪していない人とはどのようなものであるか。

不還がこれ、すなわち kāma において離貪し、bhava において離貪していない人と言われる。kāma と bhava において離貪している人とはどのようなものであるか。阿羅漢がこれ、すなわち kāma と bhava において離貪している人と言われる。

上記によれば、kāma と bhava の両者に対する貪り (rāga) は、いずれも克服されるべきものであるが、克服段階としては kāma が bhava より先にあり、bhava はその後のさらに修行が進んだ最終的な段階において克服される。「七随眠」における「欲貪 (kāma-rāga)」が「欲界」に関わるもの、「有貪 (bhava-rāga)」が「色界・無色界」に関わるものと見なされるようになったのも、このような克服の難易における kāma と bhava の間の序列を反映したもののだろう<sup>(36)</sup>。

しかしながら、原始仏教の經典中に kāma と bhava の序列に関する明確な記述を見ることは困難である。但し、別の形での段階論として、AN, 4.14.131 には (1) 下界に結びつける束縛 (orambhāgiyāni saṃyojana、五下分結)、(2) 再生をもたらす束縛、(uppatipatīlābhikāni saṃyojana) (3) 生存をもたらす束縛 (bhavapatīlābhikāni saṃyojana) という三種の段階における束縛と解放が示されている。ここでは、(3) の生存 (bhava) をもたらす束縛から解放されたものが、阿羅漢 (Arahato) になると説かれているのであり、最終段階が bhava からの解放である点において先の Puggala-paññatti との共通している。

このように、kāma と bhava においては kāma が後退する形で序列化がなされたのであるが、

その前提には、既に kāma、bhava が一對の概念として存在していたという事実がある。また、原始仏教において kāma と bhava に対する心の働きの克服が、少なくともある時期までは、重要な課題と見なされていたと考えることができる。このことは、原始仏教における kāma の意味を考える際にも十分留意すべきだろう。

#### 4. 「三有」

「三有」における kāma と bhava の関係は、ここまで見てきた並行的な関係とは全く異なるものである。だが、これについて論じる前に、原始仏教の經典には所謂「欲有」ではない kāma-bhava が存在していたことにも、簡単に触れておく必要があるだろう。

##### 4.1. Sn における kāma-bhava

Sn に現れる kāma-bhava に対して、Paramatthajotikā (以下 Pj)<sup>(37)</sup> はそのすべてを Dvandva (「kāma と bhava」) と解している<sup>(38)</sup>。具体的には Sn の次のような用例に対して、各々下記の註釈が付されている。

“Gambhīrapaññaṃ nipuṇatthadassim / akiñcanaṃ kāmabhava asattaṃ …” (Sn, 176)

「深い智慧があり、微妙な道理を見、無所有で kāma-bhava に対する執着がない… (略)。

→ Pj: 「二種の kāma と三種の bhava に執着しない (duvidhe kāme tividhe ca bhava alagganena)」<sup>(39)</sup>

Yo ‘dha kāme pahatvāna anāgāro paribbaje, / kāmabhavaparikkhīṇaṃ… (Sn, 639)

kāma を捨て、家を出て遍歴し、kāma-bhava が尽きたもの… (略)

→ Pj: 「kāma が尽き、また bhava が尽きた人 (parikkhīṇa-kāmañ c’ eva parikkhīṇa bhavañ ca)」<sup>(40)</sup>

“Yaṃ brahmaṇaṃ vedaguṇaṃ abhijāṇā / akiñcanaṃ kāmabhava asattaṃ, …” (Sn, 1059)

「ヴェーダに精通したバラモンは、無所有で kāma-bhava に対する執着がなく… (略)。

…evaṃ pi Todeyya muṇiṃ vijāna / akiñcanaṃ kāmabhava asattaṃ” ti (Sn, 1091)

…(略) トーデイヤよ、聖者はまたこのように無所有で kāma-bhava に対する執着がないと知るがよい。」

→ Pj: 「kāma と bhava に対する (kāmesu ca bhavesu ca<sup>(41)</sup> / kāme ca bhava ca<sup>(42)</sup>)」<sup>(43)</sup>

上記 176 偈の註釈のように、Pj は bhava を「三種の bhava」(すなわち「三有」)として捉えているのであるが、kāmabhava はあくまでも「kāma と bhava」なのである<sup>(44)</sup>。

実際、Sn における kāma-bhava を Dvandva と見るのか Tatpuruṣa と見るのかという点に

関しては、Sn の翻訳者によっても見解は異なっている<sup>(45)</sup>。確かに、Sn の中には kâma を状況的に用いた用例 (「kâma における清浄行 (kāmesu brahmacariya (Sn, 1041))」) も存在しており、kâma-bhava を Tatpuruṣa として、すなわち「kâma における bhava」として解することも不可能ではない<sup>(46)</sup>。

だが、ここで指摘したいのは、Sn に現れる kâma-bhava が、Pj においては「kâma と bhava」として註釈されているという事実である。kâma と bhava の両者を、独立・並行した概念として挙げることは、Pj の作者にとって至極当然のことであった。その背景には、おそらく本稿で考察した kâma と bhava に関する並行的な位置付けがあったのだろう。ここで、敢えてこの点を強調するのは、kâma-bhava=「欲有」という一律の解釈によって、kâma と bhava 双方の独立性が見失われるのを回避するためである。

#### 4.2. 「三有」における kâma-bhava

散文經典に現れる「三有」は、多くの場合「有 (bhava)」の内実を解説する形で現れ、その際には必ず「欲有」、「色有」、「無色有」の三種が纏まって言及される。

Tayo 'me āvuso bhava: kāmabhavo rūpabhavo arūpabhavo. Upādānasamudayā bhavasamudayo, upādānanirodhā bhavanirodho. (MN, 9)<sup>(47)</sup>

友らよ、これら三つの有がある。すなわち欲有、色有、無色有である。取の生起によって有の生起があり、取の滅尽によって有の滅尽がある。

また、場合によっては次の用例のように「三界」説と共に現れる。

Kāmadhātuvepakkaṇ ca Ānanda kammaṃ nābhavissa api nu kho kāmabhavo paññāyethā ti? / No h'eta ṃ bhante. (略)

Rūpadhātuvepakkaṇ ca Ānanda kammaṃ nābhavissa api nu kho rūpabhavo paññāyethā ti? / No h'eta ṃ bhante. (略)

ARūpadhātuvepakkaṇ ca Ānanda kammaṃ nābhavissa api nu kho arūpabhavo paññāyethā ti? / No h'eta ṃ bhante. (略) (AN, 3.8.76)<sup>(48)</sup>

「アーナンダよ、欲界に異熟する業がなくとも欲有はあると認められるのだろうか。」「尊者よ、そんなことはありません。」(略)

「アーナンダよ、色界に異熟する業がなくとも色有はあると認められるのだろうか。」「尊者よ、そんなことはありません。」(略)

「アーナンダよ、無色界に異熟する業がなくとも無色有はあると認められるのだろうか。」「尊者よ、そんなことはありません。」(略)

「三有」における「有（bhava）」とは、衆生の生存する状態のことであり、kāma-bhava は「欲有」、「色有」、「無色有」という排他的な三種の場の最下層を意味している。したがって、ここでの kāmā と bhava は、共に静的な状況として個々人の活動の背後に退いているのであるが、一方で、先に「欲漏・有漏」、或いは「欲愛・有愛・無有愛」において示された kāmā と bhava は、個々人に直接的に関与する力動的な煩惱因として立ち現れる。「三有」における kāmā と bhava には、このような特性は完全に失われているのであり、ここに kāmā と bhava の用法上に見られる一種の断層が存在していると考えられることができるだろう。

## 5. 結び

本稿では、散文経典に現れる定型的な教理項目中の kāmā に焦点を当てて考察を行った。その結果、kāmā は教理項目の下位分類中に多く現れ、その際にはしばしば bhava と共起する。そのため、本稿では kāmā と bhava の関係性に焦点を当てて検証を行い、両者が一對の並行的な概念として教理項目中に組み込まれていることを明らかにした。その際、背景となった原始仏教思想に関する考察も併せて行った。

本稿で明らかになったのは、次のような点である。

- (1) kāmā-āsava を含む「三漏」は、〈kāmā, bhava, avijjā〉を構成要素として含んでいるが、このうち、kāmā と bhava は、煩惱を生む心の働きの対象として、一對の並行的な概念と捉えられていた。
- (2) 並行的な概念としての kāmā と bhava の関係性は、「三愛」、「三求」にも見て取ることができる。但し「三愛」においては、本来 taṇhā と強い結びつきを有していた bhava に kāmā が加わり、taṇhā という概念を軸に「三愛」として纏められたと考えることができる。
- (3) 修道論の体系化に伴い、kāmā と bhava の間には序列が生じた。その結果、kāmā よりも上位の段階に bhava が置かれるようになった。
- (4) 「三有」思想における kāmā と bhava は階層化された静的な状況を意味しており、「三漏」、「三愛」、「三求」に見られるような個々人と直接的に関わる kāmā と bhava の概念とは異なるものである。

### 〔注〕

- (1) 若干の異同は認められるが、第 33 経は漢訳『長阿含経』卷第八「衆集経」（大正蔵一、3b-52c）、第 34 経は『長阿含経』卷第九「十上経」（大正蔵一、52c-57b）に相当する。両経に現れる教理項目数は、DN, 33 経が 1005、DN, 34 経が 550 であり、そのほとんどが重複している。
- (2) DN33、34 経に見られる形式はアビダルマの先駆的な形態と考えられ、両経は原始仏教後期の成立であると考えられることができるだろう。水野〔1997〕では、パーリ・アビダルマを、以下に示す (1) か



ら(6)の論述形式によって初期・中期・後期の三段階に区分しているが、このような論述形式の萌芽は原始仏教後期の經典中にも見ることができると述べている。DN iii, 33, 34 経はこの内(1)に類する論述形式を有していると言ってよいだろう。

- (1) 諸法を一法二法三法というように増一的に集成すること。
- (2) ある徳目をその徳目に従って類集し、それを分別解釈すること。
- (3) 語句をアビダルマ的に定義すること。
- (4) 諸法をあらゆる方面から考察すること。
- (5) 諸法を百二十二問によって分別すること。(諸門分別)
- (6) 諸法の相摂・起滅等の関係を考察すること。(水野 [1997], p. 22)

(3) DN, 33 経、34 経をあわせて 1000 を超える教理項目の中で、kāma に関連するものは表中に示したものに限られるが、実際に經典中に現れる頻度は決して少なくないのである。

(4) 榎本 [1978-1979] によれば、āsava とは「流入」を意味し、行為の結果とその解消に関するインド人に一般的な理論を表すものであるという。また、ジャイナ教はこの理論を保持したが、仏教はこれを新しく精神的なものに変化させたという。原始仏教における āsava の語義の変遷については、榎本 [1978-1979] 次の二点を指摘している。

- (1) āsava から流入の意味が失われ、一方では輪廻の原因、他方では行為の余勢、煩惱の余勢、或いは煩惱と同次元のものへと展開する。
- (2) やがて、āsava は流出へと意味転化する。

(5) MN (全 152 経) において「漏尽智」の定型が現れるのは下記の経においてである。

MN, 4(MN i, p. 23)、MN, 19(MN i, p. 117)、MN, 27(MN i, p. 183)、MN, 36(MN i, p. 249)、MN, 39(MN i, p. 279)、MN, 51(MN i, p. 348)、MN, 60(MN i, p. 413)、MN, 65(MN i, p. 442)、MN, 76(MN i, p. 522)、MN, 79(MN ii, pp. 38-39)、MN, 85(MN ii, p. 93)、MN, 94(MN ii, p. 162)、MN, 100(MN ii, p. 212)、MN, 101(MN ii, p. 227)、MN, 112(MN iii, p. 36)、MN, 125(MN iii, p. 136)

同様に DN (全 34 経) において「漏尽智」の定型が現れるのは以下の経においてである。なお、經典によっては、同じ内容が隣接して二度、三度と繰り返されている。

DN, 2(DN i, p. 84)、DN, 3(DN i, p. 100)、DN, 4(DN i, p. 124)、DN, 5(DN i, p. 147)、DN, 6(DN i, p. 158)、DN, 7(DN i, p. 160)、DN, 8(DN i, p. 174)、DN, 10(DN i, p. 209)、DN, 11(DN i, p. 215)、DN, 12(DN i, p. 233)

(6) 「漏尽智」の前段には、多くの場合四禪の修習が挙げられる。四禪の後には「漏尽智」のみが挙げられる場合と「三明」が示される場合、及び「六明」を挙げる場合がある。

(7) MN i, p. 23

(8) 水野 [1997] によれば、Dhamma-saṅgaṇi は中期アビダルマに属し、後述する Puggala-paññatti は初期アビダルマに属している。(水野 [1997], pp. 22-23)

(9) Dhammasaṅgaṇi, p. 195

(10) 「欲漏」に関する記述は、Niddesa における kilesa-kāma の註釈の前半部分とほぼ同趣旨である。第二章の注に示したものを再掲する。

kilesa-kāma とは何か。kilesa-kāma とは、欲求であり、貪りであり、欲求と貪りであり、思惟であり、貪りであり、思惟における貪りであり、kāma における kāma への欲求、kāma への貪り、kāma における欲び、kāma への渴愛、kāma への愛執、kāma による苦悩、kāma における昏迷、kāma への執着、kāma という暴流、kāma という軛、kāma への取着、kāma への欲求という蓋である。(Nd, vol. 1, p. 2)

(11) Dhammasaṅgaṇi, pp. 195-196

(12) 原典には、「苦の滅における無知」の一節が抜けているが、ここでは原典に従って訳出した。

(13) この語の翻訳は佐藤 [1938] の訳に拠った。(佐藤 [1938] p. 286)

(14) たとえば、AN, 4. 1. 10 では、「四軛」の下位分類項目についての定型的な教説の後に、次のような概略的な偈が付されている。



Kāmeyogena saṃyuttā bhavayogena cūbhayaṃ / Dīṭṭhiyogena saṃyuttā avijjāya purakkhatā /  
Sattāgacchanti saṃsāraṃ jātimaraṇagāmino. / Ye ca kāme pariññāya bhavayogaṃ ca sabbaso /  
Dīṭṭhiyogaṃ samuhacca avijjaṃ ca virājayaṃ / Sabbayoga-visaṃyuttā te ve yogātigāmino ti.

(AN, 4. 1. 10) (AN iv, p. 12)

kāma の軛と bhava の軛の両者に縛られ、見解の軛に縛られ無知に導かれる衆生は、生と死に向かう者、輪廻に赴くものである。Kāma と bhava の軛を遍く知り尽くし、見解の軛を根絶して、無知を離れ、すべての軛をはずした者、彼らは軛を越えたものと言われる。

(15) MN i, p. 504

(16) MN i, p. 504

(17) 但し、Sn には kâma-taṇhā の使用は見られない。

(18) ここでは「種々の生存」と訳したが、翻訳書には「有・非有」を含めたさまざまな訳語が見られる。いずれにせよ、幾度も繰り返される再生と再死を意味するというのが、bhavābhava の主たる解釈である。

(19) なお、「種々の生存」の代わりに、「再生 (puna-bhava)」が用いられることがある。

“Taṇhādhīpanne manuje pekkhamāno / Piṅgiyā ti Bhagavā / santāpajāte jarasā parete,— / tasmā tuvaṃ Piṅgiya appamatto / jahassu taṇhaṃ apunabbhavāyā” ti (Sn, 1123)

ピンギヤよ、taṇhā に陥った人々が苦悩を生じ、老衰に打ち負かされるのを観察しているのだから、それゆえピンギヤよ、あなたは怠ることなく、再生しないように taṇhā を捨てよ。

また、Sn の 517 偈、519 偈、638 偈、740 偈、752 偈、729 偈、746 偈には「saṃsāra」(輪廻) が用いられているが、最古層経典である Av、Pv にはこの語が現れない。これについて並川 [2008] は、原始仏教が対峙していたバラモン教の説く「輪廻」という表現を直接的に用いたくないため、バラモン教で用いられていた「輪廻」を避けたのではないかと述べている。(並川 [2008]、p. 97)

(20) MN i, p. 108

(21) AN ii, p. 1

(22) DN ii, p. 90

(23) AN ii, p. 247

(24) 但し、「縁起」説に関連する教説では「六愛」となる。

(25) It, p. 50

(26) 中村 [1994] によれば、元来一つであった taṇhā がある時期に「kâma-taṇhā」と「bhava-taṇhā」に分かれ、さらに後になって「vibhava-taṇhā」が付加されたということである。(中村 [1994]、p. 459) しかしながら、Av に既に vibhava-taṇhā が現れているのに対し、Sn には kâma-taṇhā の使用が見られないという点から、少なくとも Sn に関して上記の説は当て嵌まらないのだろう。

(27) 「三愛」の形成過程で taṇhā がそのような位置付けに置かれたのか、或いは taṇhā の位置付け自体が「三愛」成立の根拠となったのかは、現時点では不明である。

(28) Niddesa i, p. 245

(29) たとえば、カタ・ウパニシャッド (Kāṭha-Upaniṣad, KU) において、ナチケートスは死神ヤマに以下のように問いかける。

死んだ人間に関して、次の疑惑がある—「彼は存在する」と、ある人々は言う。「彼は存在しない」と、他の人々は言う。

お前に教えられて、わたしはこのことを知りたい。これが、三つの願いの中の第三のものである。(KU i, 20) (湯田 [2000] p. 446)

この物語からも、古代インドの人々にとって、死後の存在の有無が極めて重要な関心事であったことが窺える。

(30) 原始仏教は輪廻に関わる見解に拘泥することを否定したが、一方で輪廻思想それ自体を直接否定することはなかったようである。なお、これに関して並川 [2008] は、Sn においては輪廻への拘りが仏教の教えと相反すると見なされていること、Sn 全体が輪廻を否定する文脈で説かれていることを

指摘している。(並川 [2008]、p. 99)

(31) It, pp. 43-44

(32) これに関連して、Av には次のような偈を見ることができる。

Dhonassa hi n' atthi kuhiñci loke / pakappitā diṭṭhi bhavābhavesu, / māyañ ca mānañ ca pahāya  
dhono sa kena gaccheyya : anūpayo so. (Sn, 786)

清められた人は、実にいかなる世においても種々の生存に対する構想された見解がない。幻惑と慢心を捨て、清められた人はどうして(種々の生存に)赴くことがあるだろうか。彼は執着のない者である。

このように「常見・断見」は、生存(bhava)と見解(diṭṭhi)に跨る概念でもある。

(33) 片山 [2006] の補注では、欲貪と結ばれた不善の身業、語業、意業が kāma-esanā であり、有貪と結ばれた不善の身業、語業、意業が bhava-esanā であり、辺執見と結ばれた不善の身業、語業、意業が brahmacari-esanā であるとされている。(片山 [2006]、p. 267) ここでも、修道論的な解釈がなされていることがわかる。

(34) AN ii, p. 41

(35) Puggalapaññatti, p. 32

(36) 原始仏教經典中の anusaya (随眠) の数は、常に「七」と決まっているわけではない。たとえば、MN, 9 経では「貪、瞋、見、慢、無明」の 5 であり、MN, 44 経、148 経では「貪、瞋、無明」の 3 であるとされ、さらに MN18 経では「貪、瞋、見、疑、慢、有貪、無明」の 7 とされている。このように、anusaya (随眠) の教説は「三漏」のように早くから固定された表現形式を持っていたわけではない。したがって、「欲貪」、「有貪」に関しても当初より序列化に対応した形で置かれていたわけではないのだろう。

なお、註釈書には「欲漏」、「有漏」に関する序列を示唆する記述が見られる。それによると「欲漏」とは pañca kāmagaṇā のある貪り、「有漏」とは色・無色の生存への貪り、及び常住・断滅の邪見を伴う禪定への欲求を意味しているという。(片山 [1997]、p. 51)

(37) Paramatthajotikā は 5 世紀にブッダゴーサによって作成された Sn の註釈書である(但し、異説あり)。Nd と註釈箇所が重複する部分では、概ね Nd の解釈を尊重し踏襲している。

(38) これ以外にも「taṇhābhava は尽きた (taṇhābhavaparikkhīṇaṃ (Sn, 640))」に対して、Pj は「taṇhā と bhava」というように註釈しており、kāma 以外の概念においても bhava との関係性は同等のものとなされている。(Pj ii, p. 469)

(39) Pj i, p. 215

(40) Pj ii, p. 469

(41) Pj ii, p. 592

(42) Pj ii, p. 597

(43) なお、これに関してはタイ語版を底本とする『小義釈』(水野訳)でも同様の註釈がなされている。(水野 [1940]、p. 125、p. 215)

(44) これに関しては、Nd の註釈も同様である。

(45) kāmabhava の解釈は翻訳者によって異なっている。たとえば水野 [1939]、中村 [1991] は Tatpuruṣa として訳出し、荒牧 [1986] は Dvandva に解している。また、宮坂 [2002] では両者が混在している。また、英訳では Norman [2001] がすべて Dvandva に解している。以下、和訳の用例を挙げる。

・水野訳: Sn, 176、639、1059、1091 偈=「欲有」

・中村訳: Sn, 176、1059 偈=「欲の生存」、1091 偈=「欲望の生存」、639 偈=「欲望の生活」

・宮坂訳: Sn, 176、1059、1091 偈=「欲望の生存」、639 偈=「欲望と生存」

・荒牧訳: Sn, 176 偈=「欲望の対象にも、くり返し再生してそのまま生きていく世間的存在にも」、  
1059 偈=「さまざまな欲望の対象にも、繰り返し再生してこのまま生きていく存在にも」、  
1091 偈=「さまざまな欲望の対象に対しても、くり返し再生してこのまま生きていく輪廻

的存在に対しても」、639 偈＝「欲望もなく、それによって生まれ変わることもない人」  
(46) 但し、Tatpuruṣa と解するとしても、Sn に現れる kāmabhava はもちろん「三有」における「欲有」ではない。なぜなら、本文中の用例のように原始仏教経典における「三有」の教説は kāma-bhava、rūpa-bhava、arūpa-bhava が一組で言及されるのが原則であり、さらに Sn には未だ「三界」説が現れないからである。中村 [1994] は、「三界」説そのものが後代の教義学者の案出したものであると述べている。(中村 [1994]、pp. 695-697 参照)

なお、Sn にも「色 (rūpa)」、「無色 (arūpa)」という語の使用を見ることができる。これについて中村 [前掲] は、Sn では世界を「物質的領域」と「非物質的領域」の二つの領域に分け、それぞれの領域における生存を説いたと述べている。(中村 [1994]、pp. 724-725)

Ye ca rūpūpagā sattā ye ca aruppavāsino / nirodhaṃ appajānanta, āgantāro punabhaṃ. (Sn, 754)

色に属する衆生と無色に住む衆生は、滅尽を知らないため再生に至る者である。

Ye ca rūpe pariññāya aūpesu susaṇṭhitā. / nidodhe ye vimuccanti, te janā maccuhāyino ” ti. (Sn, 755)

しかし色を明らかに知り、無色によく安立する者は滅尽において解脱し、死を捨て去った人々である。

同様に、SN の Sagātha-vagga-samyutta においても、SN i, 5.3 (SN, p. 131)、SN i, 5.6 (SN i, p. 133) に、色／無色の「二界」が示されている。また、Tha には 378 偈に kāma-dhātu が現れるがこれも単独の使用であり「三界」説とは関連がないだろう。

(47) MN i, p. 50

(48) AN i, p. 223

#### 〔参考文献〕

- 荒牧典俊、本庄良文、榎本文雄訳 [1986] 『ブッダの詩 I』、原始仏典第 7 巻、講談社  
榎本文雄 [1978-1979] 「āsrava について」『印度学佛教学研究』vol. 27、No. 1、pp. 158-159  
片山一良 [1997] 『中部 根本五十経篇 I』、パーリ仏典 1、大蔵出版  
—— [2006] 『長部 パーティカ篇 II』、パーリ仏典〈第二期〉6、大蔵出版  
佐藤良智 [1938] 『法集論』、南伝大蔵経 45、大蔵出版  
中村元訳 [1991] 『ブッダのことば』、ワイド版岩波文庫  
—— [1994] 『原始仏教の思想』II、中村元選集（決定版）第 16 巻、春秋社  
並川孝義 [2008] 『「スッタニパータ」仏教最古の世界』、岩波書店  
水野弘元訳 [1939] 『小部経典 2』、南伝大蔵経 24、大蔵出版  
—— 訳 [1940] 『小部経典 22』、南伝大蔵経 44、大蔵出版  
—— [1997] 『パーリ論書研究』水野弘元著作選集 3、春秋社  
宮坂宥勝訳 [2002] 『ブッダの教え スッタニパータ』、法蔵館  
湯田豊 [2000] 『ウパニシャッド —— 翻訳および解説』、大東出版社  
Norman, K. R., (Tr.), 2001, *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*, second edition, The Pāli Text Society, Oxford.

(あんど う よしこ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：山極 伸之 教授)

2018 年 9 月 23 日受理